



ドイツ連邦共和国

派遣期間 2012年4月～2015年3月

ベルリン日本人国際学校 帰国報告

～ コミュニケーションが「壁」を崩す ～

稚内市立稚内南中学校

教諭 西林 慶武

1. ドイツ連邦共和国について

ゲルマン民族の大移動にまでさかのぼるドイツの歴史は、時代によっていくつもの国や自治都市が割拠し、独自の文化を築いていった。現在は、日本とほぼ同じ国土を持つドイツは、大小合わせて16の個性的な連邦州からなる。ドイツ連邦共和国としてまとまりはあるものの、中世の頃から脈々と引き継がれているそれぞれの地方の特徴を保持しつつ、各州政府が教育や法政などに強い権限を持ち、独自の政治を行っている。そのため、各都市が独自の文化をもち、そこで暮らす人々にも、歴史的背景が少なからず影響している人柄があるように思う。

今年2015年からちょうど25年前に、かつて東西に分断されていたベルリンの壁が崩壊したことを受け、東西ドイツの再統一を果たすとともに、首都として再び咲いたベルリンは、その大きさにも驚くが、治安の良さや、自然の多さにも驚かされる。また、親日家が多いことに加え、移民を多く受け入れていることにより、国際色が豊かな国であることから、日本人が安心して暮らせる環境でもある。

2. 派遣国の生活全般にかかわって

(1) 生活全般に見られるドイツ人の国民性

①住居

ドイツ人は秩序を尊び、規律を愛する気質があることから、日常生活の多くの場面でルールを守ることが求められる。逆に、ルールを守っていれば各人が快適に生活することができるのもいえる。日曜、祭日は宗教的伝統と労働者の権利を守るため、一部のスーパー以外は営業していない。

ドイツでは、謝ることは自分の非を認めることになるので、交通事故や意見の対立があった場合などは第三者の公平な判定を取り付けるまで軽々しく「すみません」といわないように気をつけなければなりません。問題を訴訟で解決することも少なくないので、安易な発言が後々の裁判に不利に働くことがないように注意が必要になる。

また、欧米ではサインの効力が絶対なので、どんなものであってもうかつにサインすべきではなく、内容を精読、熟考した上で行うように注意が必要。

②食生活

生鮮食料品は、日本よりやや安く入手できる。ビールやワインなどの酒類も安く、ベルリンはパリやロンドンと比べると物価が安いと言われるが、実際の生活面の費用は日本と変わらないと感じた。肉類、野菜、果物、乳製品は日本より比較的安い値段で売られ、スーパーなどで簡単に入手可能。野菜もかつてはジャガイモしか手に入らないと言われたようだが、滞在した3年間でも、EUのあちらこちらから輸入された新鮮な野菜が、スーパーなどでも簡単に手に入るように変化してきているのを感じた。

水は衛生状態としては問題ないので、そのまま飲用することができるが、水の硬度が高いため、BRITAなどのフィルター（簡易浄水器）を利用したり、ミネラルウォーターをスーパーマーケットで購入して飲用したりする人も多い。学校にもBRITA付きのポットがあるので、子どもたちにはそのポットから飲料水を用意している。

スーパーやデパートは日曜日に営業をしていないが、レストランは日曜日や祝祭日でも開いている。それどころか多くの店は夜遅くまで開いており、利用することができる。ベルリンは

もちろん、ドイツ全体で、ドイツ料理はもちろん、イタリアンレストランや中華料理が多くある。その他、トルコ料理、ギリシャ料理、寿司や日本料理のレストランも多く見かけた。また、ベルリンが発祥のカリーブルストやケバブ、日本でもなじみの深いマクドナルドやバーガーキングなどのファーストフード店もたくさんあり、利用している人も多い。

アジア食材店がいくつかあり、日本食材は値段が少々高くなるが、お米はもちろん、味噌、醤油、わさびやからしなど、大体のものが手に入る。

③交通

ドイツ国内の大きな町では、バスや鉄道が整備されており、利用方法さえ間違えなければ、快適に利用することができる。特に、ベルリン市内は交通の便がとてもよく、Sバーン(近距離電車)、Uバーン(地下鉄)が市内を網羅している。ベルリンでは1枚のカルテ(乗車券)があれば、SバーンやUバーン、バスはもちろん、路面電車や船も使うことができる。使える時間は、2時間以内という制約があるが、日本のように乗り物に乗るたびに切符を買ったり、料金を加算されたりすることがないので大変便利で経済的。

ドイツでの車を運転する場合は右側通行だが、そのほかの交通法規は日本とほぼ同じだし、度量衡も日本と同じなので、車の運転もしやすいと言える。アウトバーンと呼ばれる高速道路があるので、みんながスピードを出しているように思われがちだが、30 km/h 制限や50 km/h 制限の標識もあり、交通ルールは比較的守られている。(アウトバーンもすべて速度無制限というわけではなく、区間によっては速度が制限されているので注意スピード制限と併せて注意したいのが信号遵守。ドイツでは信号無視が重大な違反になるので、日本で運転する感覚より、早めにブレーキを踏む意識を持つ必要がある。また、自転車に乗る人もとても多く、運転の際には車道を走る自転車にも注意が必要になる。

④英語とドイツ語

ドイツでは、若い世代を中心に英語の必要性が高まると共に、英語力の向上が見られ、ベルリンでもここ数年で英語教育の改革が行われている。ドイツ語と英語は兄弟言語と呼ばれるほど似ているため、多くのドイツ人が日本人の英語学習中級者レベル(2級程度)の英語は十分に使いこなすように思う。

とは言え、ドイツ語は毎日の生活をする上で必要になるし、旧東ドイツに住んでいた人達は、学生時代に英語ではなくロシア語を学んでいたそうなので、ドイツ語ができるとコミュニケーションの幅が広がると思う。赴任してからは、ドイツ語の家庭教師についたり、**Volkshochschule**(フォルクスホーホシューレと読む。公立の学校で値段は安い。)や**Privatschule**(プライベートシューレと読む。ゲーテなどの私立の学校で値段は高いが、短期間で上達できる可能性がある。)に行ったりして、ドイツ語を勉強できる。

3. ベルリン日本人国際学校の特徴

ベルリンは、ドイツ連邦共和国の首都ということもあり、ドイツ国内に限らずEU全体、さらには世界でも有数の文化、学術、政治の中心地の一つになっている。そのためか、ベルリン日本人国際学校に通う児童生徒たちの保護者の多くが、研究者や新聞社などがほとんどである。同時に日本の大企業が無いことから、児童生徒の数はあまり多くなく、全児童生徒がお互いに関わり合い、助け合いながら学校生活を送るこぢんまりとした学校である。

ベルリン日本人国際学校は、その名前が示すように、ベルリンの教育委員会にも学校として認可され、校舎を貸与してもらっている。昨年迎えた20周年までの道のりの中では、校舎として借用していた建物が変わったり、設立に携わった事務局長がご勇退されたりしたものの、設立当時から続いているベルリンの自然、文化、歴史を学ぶ時間や、現地姉妹校との交流が教育活動の重要な柱として位置付いている。

現在使用している校舎は、現地小学校に併設された建物を活用していることもあり、中庭や講堂、さらには体育館を使用する際には、現地校にそれらの施設を貸してもらって授業や行事を行っている実態がある。当然、不便なことも多いが、現地校と隣接しているという状況は、そこに通う子ども達と毎日交流する機会をもてるという利点もあり、お互いの学校の授業を体験し合う

授業交流や、学校祭などの行事の交流、さらには独日の児童生徒と一緒に合唱を行うコーラス活動などがある。

4. 第二言語習得に向けたコミュニケーション能力の育成の必要性

(1) コミュニケーション能力の重要性

長年、英語教育に携わるなかで気づいたこととして、児童生徒の英語力を高める為には、以下の2つの要素が重要であると感じていた。1つ目は、学習や生活を通してたくさんの英語に触れさせる機会をもち、たくさんの英語を聞いたり、読んだりすること。多読、多聴はもちろん、外国語を身につけるためには、海外でその言語をたくさん聞いたり、読んだりする環境に身を置く効果が上げられるのは、このためだと考えられる。2つ目は、たくさんの英語に充分触れたうえで、それらの英語を活用する機会を持つことである。日本人が、英文を聞き取ったり、読み取ったりすることは得意であるが、それらを用いて自分の言いたいことを表現したり、会話することを苦手とすると言われる理由の一つとして、英語を表現する機会の不足していることや、いわゆるコミュニケーション能力と言われる、英語を用いて他者と意思疎通を図ろうとする姿勢の欠如があげられると思う。つまり文法や単語の知識ばかりを詰め込んでも、実際に活用したり、表現したりしなければ、学習した内容を運用段階にまで高めることができないし、相手を理解しようという姿勢が身につけていなければ、コミュニケーション能力の向上は期待できないと考える。もちろん、いくら英語で表現することが重要だとはいえ、訳もわからず英語を話そうとしてもあまり効果がなく、前提としてある程度の量の外国語に触れることが重要ではある。日本人学校に通う生徒の中にも、各種テストや英語検定などの高い資格を取得しているものの、コミュニケーション能力が身につけておらず、母国語でも自分の言いたいことを上手に表現できなかったり、場にそぐわない言動をしたりしてしまう児童生徒も少なくないという実態がある。

(2) 日本人学校生徒のドイツ語力と英語力について

日本人の児童生徒たちが、現地校に通う児童生徒たちと交流をしたいと思っても、言葉の壁に阻まれ上手く意思疎通がはかれず、多くの場合思うようにコミュニケーションがとれないことが多い。ベルリン日本人国際学校では、小学校1年生から中学校3年生までの全校生徒を、レベル別に3つのクラスに分け、ネイティブスピーカーによるドイツ語の授業を、週2回実施している。しかしながら、習得には時間がかかり、両親のいずれかがドイツ語話者である場合や、言語習得能力が非常に高い児童生徒を除き、なかなかドイツ語を自由に使うことは難しい。

一方の英語力であるが、保護者及び児童生徒達の英語学習への意欲関心は非常に高く、ベルリン日本人国際学校では、小学校3、4年生は週1回、小学校5年生以上は、週2回の英会話の授業も行っている。しかしながら、小学生ながら英語検定の準2級や2級を取得しているから、英語のみでスムーズな意思疎通ができるかという点、必ずしもそうではない。実際に英語を用いて会話する十分な経験が無いまま、現地校やインターナショナルスクールへ入学しても、上手に意思疎通を図ることができないため馴染めず、再度日本人学校に入学し直す児童生徒の例をみるにつれ、英語でスムーズに意思疎通をはかるためには、ある程度の英語力に加え、コミュニケーション能力を向上させることが重要であることに気づかされた。

以上のような状況で、中学生の英語の授業は、日本の検定教科書を用いながらも、生徒が英語を話す時間をできるだけ多く確保し、児童生徒が英語を用いてコミュニケーションをとったり、活動をしたりする中で、文法や語法を理解するという授業の必要性を強く感じ、実践に移した。しかし、せっかく学習した英語を同年代のドイツ人とコミュニケーションをとる機会は、なかなか得ることができず、是非とも実際の場面で英語を用いてコミュニケーション能力を高める機会を作りたいと考えていた。

(3) ドイツにおける英語教育への意欲高揚

ドイツ語は英語と類似点も多いことから、ベルリンでも若い世代を中心に英語を用いた意思疎通が可能なことが多い。近年、ドイツでは英語教育への関心が高まっており、学校によっては小学校1年生から英語学習が始まっている。ベルリン日本人国際学校に隣接するコンラート小学校との交流授業と、日本人学校の姉妹校であるドライリンデンギムナジウム（現地名 Dreilinden

Gymnasium)でも、英語の授業が小学校1年生から始まっており小学校5年生程度で、日本の中学校2年生程度の内容を含む教科書を使いこなす。

(4) 現地校との交流授業から見た、日本人学校生のコミュニケーション能力の課題

① 現地小学校との交流授業

ベルリン日本人国際学校では、隣接するコンラート小学校(現地名 **Conrad Grund Schule**)と、姉妹校であるドライリンデン小学校(現地名 **Dreilinden Grand Schule**)と交流する機会を設けている。特に隣接するコンラート小学校との交流の一環として、コンラート校の授業へ日本人学校の児童が参加したり、コンラート校の児童を日本人学校の授業に招待したりする交流が学校全体で行われている。この交流で中学校の英語授業を行い、日本人学校の生徒と一緒に現地校へ通う児童生徒が授業をうけることで、英語によるコミュニケーションをとる機会を作ることができると考えた。

同時に、英語を用いてコミュニケーションをとることで、児童生徒たちのもつ「海外の友だちを作りたい。」とか、「外国語(英語)をもちいて意思疎通を図りたい。」という願いを叶えることをめざした。この取り組みは同時に、両校の児童生徒たちが英語の有用性を改めて発見し、自らの英語への学習意欲の喚起に繋がると考えた。



② 授業の内容

2012年12月に行われた1回目の授業では、コンラート校5、6年生の児童約15名を2グループに分け、各グループに日本人学校の生徒を1名ずつ配置した。日本の生徒とドイツの生徒で、英語でコミュニケーションを取りながらクリスマスカードをつくるという活動を中心に据え、日本人中学生2名(中2)には、具体的な活動内容と、クリスマスカードの作り方について理解させ、英語での説明の仕方を練習しておいた。

③ 交流授業を通して見えてきたこと

実際に授業が始まると、作業に集中するあまり、残念ながらあまり会話が進まなかったが、コンラート校の児童たちが、英語の文法ではなく、ドイツ語の文法で英語を話し、間違えることを恐れずどんどん英語でコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。特徴的な場面として、「次は何をすべきか?」「What should this do?」とたずねたのに対し、日本人学校の中学生たちが、言葉ではなく、実際にやってみて説明する場面があった。授業の最後には、「Thank you for your interesting class.」や「I enjoyed this class.」など英語で感想を述べるなど、コンラート校の児童たちは、小学校5年生程度でも英語を用いて積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が身につけていることが伺えた。

ベルリンに限らず、海外で生活すると、日本人に比べ欧米人がコミュニケーションをとることへの躊躇が少ないことに気づかされる。わからないことがあると、いちいちネットに接続して自力で何とかしようとする日本人に対し、わからないことがあれば近くにいる人に尋ねて解決し、他者と関わることで情報を手にしたり、会話を楽しんだりするという姿勢が欧米人には身につけていることに感心させられることが多い。

私自身も後で気づいたのだが、冷静に考えてみれば、コンラート校の小学生の英語力は、日本人学校の中学生たちよりやや高い程度であり、両者の英語力のレベルはあまり変わらず、英語でコミュニケーションをとることは十分に可能であったと考えられるが、実際には、しどろもどろになりながらなかなか英語が口から出てこない中学生の姿を見て、英語力ではない何か中学生に欠けているという実感を得た。

同年度末には、日本の中高一貫校にあたるギムナジウムとも交流する機会を得たのだが、1時間目の英語の授業は、交流とはいいながら参観しただけで終わった。続く体育の授業では、

変則的なドッチボールを一緒に行うなかで、ドイツ人の生徒から話しかけられたようであるが、積極的とは言い難いコミュニケーションしかとれず、日本人学校生徒の英語によるコミュニケーション能力を向上する必要性を強く感じた。

(5) 生徒のコミュニケーション能力の向上を目指した英語授業

① オールイングリッシュの授業展開

オールイングリッシュの授業展開と一言で言っても、ただ教師がいい気になって英語を話していても、生徒の英語向上にはつながらない。もちろん、基本的な指示、質問などを英語で行うことで生徒が英語に触れさせる機会を確保することができるが、授業が進むにつれて生徒の語法や文法力を高めるためには、学習させたい内容を用いて活動したり、会話したりすることが大切だと考えた。ベルリンに限らず、世界中の日本人学校の生徒たちの多くが、海外での生活経験を持ち、外国語を外国語のまま、音声を中心に学習する経験をもっていることから、オールイングリッシュの授業展開を導入しやすいと考えた。もちろん、児童生徒によっては、日本から英語に対する苦手意識を持ったまま日本人学校に入学し、オールイングリッシュの授業など全く経験の無い子どもたちもいるので、十分に配慮が必要であることを加えておく。

これらの英語授業改革の流れと、ベルリン日本人国際学校の生徒たちのコミュニケーション能力に関する課題を鑑みた時、オールイングリッシュでインタラクティブの要素が高い授業展開が、生徒達の英語力はもちろん、コミュニケーション能力の向上にも有効であると考え、学年や生徒の学習段階に合わせながら、授業形態を改善した。

オールイングリッシュの授業を行う以前の授業展開は、まず生徒に学習内容を理解させることを優先させ、理解した内容をくり返し練習することで定着させた上で、最後に学習内容を用いた表現活動を行うという流れであった。しかしながら、実態としては、理解や定着に多くの時間を割くことが多く、結果表現活動や実際に英語を使う経験を重ねるという時間が足りないことが多かったように思う。

そこで、授業の展開順序を変更し、まずその時間の学習内容を用いて、会話やゲーム活動を行い、学習内容に対する意識づけができた段階で、たっぷりとその表現を用いた表現活動を行い、最後に簡単に説明したり板書をとったり問題に挑戦するという流れが、スムーズでかつ生徒たちが実際に英語を用いて活動することに時間を割くことができる授業展開だということに気づいた。この授業展開であれば、オールイングリッシュの授業展開でも、生徒が英語を用いる時間を十分に確保することができ、しかも英語を英語のまま理解するという授業展開に非常に適しているように思う。

② オールイングリッシュ授業の着想

ドイツ人の勤勉さを象徴するものの1つとして、フォルクスホーホシューレ (Volkshochschule) の存在がある。フォルクスホーホシューレは、学校を卒業した後も自分の興味ある教科や語学、文化、スポーツなどの講義を低価格で受講することができる公共のカルチャースクールである。各講義は回数限定で行われるのものから10～12週の長期間にわたるものまでである。私自身もフォルクスホーホシューレで英語のコースに通い、ドイツ人やトルコ人とともに学習した。

私自身が講義の中で強く感じたことは、文法事項や語法については、他の受講者に劣ることはないが、積極的に英語を用いてコミュニケーションをとろうとする姿勢は全く歯が立たないという現実であった。彼らは、文法や語法の間違えなどを全く気にせず、どんどんコミュニケーションをとったり、質問したりする姿勢が見られる。これにはドイツの現地校の授業では、大人しく座っているだけでは、授業への参加姿勢としての評価がなされず、積極的に質問したり疑問をぶついたりする姿勢こそが、評価されることに由来していると考えられる。彼らは積極的に新出文法を使い、疑問があればどんどん質問することで、自分の間違いに気づき、その間違えから学ぶということに気づかされた。

同時に、フォルクスホーホシューレに通う人々の英語力の現状として、学校教育を終えた多くのドイツ人が、間違えながらも英語を話すことができる。ある程度英語を活用できるドイツ人のための英語授業で行われる活動は、そのまま日本人学校の英語をある程度活用する力を

もつ生徒たちのための授業に十分に活用できると考えたのである。両者とも、生活の中で英語を活用する場面があるものの、詳しい文法や語法についてはあまり理解せずに使っており、そのために細かいニュアンスの違いや、誤用が目立つ。そこで、私自身がフォルクスホーシューレで学習した活動やゲームを日本人学校の子どもたちに行うと、彼らは自然と英語を活用しながら、学習事項に意識を向けることができていた。

③コミュニケーションを高める具体的な学習場面

近年、英語の授業形態の変化は著しく、教科書本文を1文ずつ日本語に訳していくような、いわゆる訳読式の授業形態は減少しつつあり、よりインタラクティブに、学習した表現を活用することで、学習内容を定着させ、運用の段階にまで高めるといった形式が増えている。私自身の授業でも、1授業当たりのおよそ7割から8割がペアワークやカルタなどのグループワークを行ってきた。ペアワークやグループワークの多くが、友だちとコミュニケーションをとりながら活動することで、英語を運用する機会が確保でき、何よりゲーム性があり楽しく学習に取り組むことができるという効果がある。また、数年後には中学校でもオールイングリッシュの授業を行うことが発表され、英語を英語のままとらえさせることが求められるようになってきている。

日本人学校の実態としても、生徒たちはその時間に学習する内容について、文法的には理解していなくても、触れたことがあったり、実際に使ったりできるという実態が往々にしてある。特に I'd like to や I want to 等の表現は、日本の教科書では中学校2年生で学習することになっているが、実生活では、かなり使用頻度が高く、海外生活が始まってすぐに耳にし、使わざるを得ない状況に陥る。このように実際にその文法を活用する力がある生徒に、不定詞の文法説明をじっくり行い、ドリル活動に時間を割いてもあまり意味がないように思う。それよりは、普段使っている表現に焦点を当てながらも、説明やドリルにかける時間を最低限に削り、実際にそれらの表現を活用する機会を確保することが可能になる。

また、ベルリンの大学に通うドイツ人学生などが実習に来た際や、ドイツの現地校に通うドイツ人生徒が日本人学校の見学に来た際などには、日本人学校の生徒に英語で質問をさせたり、授業中に行うゲームに実習生と一緒に参加してもらうなど、英語を用いてコミュニケーションをとる機会を積極的に活用した。日本人学校に実習に来る学生の多くは、ほぼネイティブスピーカーレベルで英語を運用することができるので、些細な機会も活用し生徒のコミュニケーション能力を高めるように心がけた。これらの機会を重ねることにより、日本人学校の生徒たちが、英語でコミュニケーションをとることに躊躇しなくなり、会話をつづける術を身につけてきたことが大きな成果である。

(6) 交流を重ねる毎に見えてきた日本人学校生徒のコミュニケーション能力の向上

①現地小学校との英語授業交流

2012年度に行った、コンラート校との交流授業から見えた課題を解決するべく、2013年度の交流では、日本人学校の生徒とコンラート校児童とが交流する場面を少しでもつくり、できるだけ児童生徒同士が英語を用いてコミュニケーションをとる時間にしたいと考えた。しかしながら、中学生にただ英語で話さないと言っても、なかなか会話が盛り上がらないのは明らかである。

そこで、大きく2つのねらいを持ち授業を組み立てた。1つめは、ドイツと日本の文化や習慣の共通点や相違点を交流できるようなねらいを設定するという事。互いの文化を知ると言うことは、国際理解への第一歩だと考え、それらを交流し理解することで、双方の文化を尊重できるようになると考えた。



2つめは、ただ英語を話すだけではなく、実際に何かを作ったり、活動したりすることで、英語を用いる機会が確保できることをめざした。活動を説明するためには、英語を用いる必要が出てくるし、必要に迫られることが生徒同士のコミュニケーションを活性化する上で効果があると考えた。

今回は日本人学校が中学1年生2名のみクラスであったと言うこともあり、前回より活動のレベルを下げ、日本人学校の生徒に事前に活動の指示はせず、中学生とドイツ人児童に英語で指示をしながら活動を行った。前回の反省を活かし、お互いの交流が進むように、「自己紹介ゲーム」を行い、自己紹介をしながらゲームをする時間を設定した。ちなみにゲームの説明も全て英語で行ったが、混乱なく活動に取り組んでいた。前年度実施した際に、コンラート校児童の英語力が非常に高いことを確認していたので、今回はドイツと日本の文化の違いについて会話する機会を、教師のコーディネートで設けた。クリスマスツリーと鏡餅、教会でのミサと初詣、クリスマスプレゼントとお年玉、クリスマスカードと年賀状などを比較し、それぞれの文化の行事について英語で紹介したり交流したりすることができた。この時間を通して、日独の文化の違いに気づくと共に、お互いの文化を説明し交流する機会になった。

2014年に行われた3回目の授業では、コンラート校の児童の英語力が、前年度までの状況と少々異なり、英語での意思疎通に慣れていないところもあったが、日本人学校の生徒達のコミュニケーション能力が高まってきていることもあり、日本人学校の生徒が積極的にコミュニケーションをはかろうとする場面が多く見られた。2回目同様、自己紹介とグループ作りをゲーム形式で行い、4つのグループで活動を行った。内容としては、ベルリンにある水族館に掲げられている鯉のぼりを切り口に、こどもの日について説明した後、新聞紙で紙の兜を作り、日独両国の「こどもの日」について共通点や相違点を交流しあった。授業の後半には、グループ毎にドイツの年中行事についてクイズを作り、ベルリン日本人国際学校とコンラート校という隣接する2つの学校がそれぞれ異なる文化を持っていることと、異なる文化をもっているからこそ、交流を通してお互いの理解が進むことを伝えて授業を締めくくった。

②ギムナジウムとの交流授業

日本人学校の中学生と同年代の学校との交流の可能性を探り、日本人学校の近くにあるドライリンデンギムナジウムとの交流授業を、英語科のみの単独で実施した。

1時間目の英語の授業では、前半を日本人学校の生活について、ドライリンデン校の生徒が事前に考えた英語の質問を行い、それらを通してお互いの学校の様子を交流する時間になった。後半は、If節をもちいた、仮定法の授業を日独両校の生徒と一緒に参加した。授業自体が英語によるオーラルイントロダクションであったこともあり、文法内容としては日本の高等学校程度の難しい内容であったが、日本人学校の生徒達も積極的に授業に参加し、自ら挙手をして授業に参加する姿勢には、日本人国際学校でコミュニケーション能力の向上を図る授業展開を行ってきた成果が見られ、正直嬉しい驚きを感じた。

休み時間には、グループ毎に校内を案内してくれたり、一緒にバスケットボールをしたりして楽しんでいただようである。ドライリンデン校の生徒たちが積極的に話しかけてくれる姿勢に助けられた部分も少なからずあったが、教室を離れても、英語をもちいてコミュニケーションをとるという経験は、日本人学校の生徒たちはもちろん、ドライリンデン校の生徒たちにとっても楽しく有意義な経験となったように感じる。帰り際には、ドライリンデン校の生徒たちと名残惜しそうに別れる日本人学校の生徒たちの姿は、この交流が非常に意味のあるものになっ



たことを実感させてくれた。交流自体も、1年目の頃に比べてかなり充実した内容に発展したが、個人差はあるものの日本人学校の生徒のコミュニケーション能力の高まりを感じられたことが成果として大きい。

(7) 生徒のコミュニケーション能力の向上を目指した授業と、交流授業の成果

交流活動を通して、生徒の英語学習への具体的な必要感を高めることで、日常の英語学習への意欲がより具体的なものになり、その成果として高い英語力を身につけることに繋がった。この成果は、英語を学習することによって、英語を話す世界中の人達と意思疎通を図れるということに気づかせられたのはもちろん、自分たちが学んでいる英語が、コミュニケーションへ直結しているという自信にも似た実感を生徒にあたえていると感じた。もちろん、生徒が身につけた表現やコミュニケーションへの姿勢は、生徒達の英語力の向上に非常に役に立っており、結果として英語検定などの資格試験でも成果が表れていた。



また、交流授業を通して、教師自身が学んだ「日常生活や授業で積極的にコミュニケーションをとる姿勢を身につけることの大切さ」は、英語の授業で生徒のコミュニケーション能力を高める活動を多く取り入れることに繋がった。その結果、それらの授業を通して、生徒達は英語を用いて意思疎通を図ることへ躊躇しなくなるばかりか、自分の言いたいことを伝えるために「言い換え」や例示を用いて説明するというコミュニケーションに直結する力を身につける生徒が増えていった。

実践的なコミュニケーション能力の向上という観点で言えば、現地校との交流授業はまさにうってつけの取り組みであるし、授業のねらいを明確にすることで、人と人との実際のコミュニケーションを通して、コミュニケーションへの姿勢を学び合うという、非常に素晴らしい効果が生み出されたと感じている。交流を通して、日本人学校と現地校の生徒たちから学んだことへの感謝を持ちつつ、今後の教育実践に活かして行きたい。